

国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所
〒259-1293 平塚市土屋 2946
神奈川大学湘南ひらつかキャンパス
Tel. 0463-59-4111 (内線 2200)

退職記念号

後藤伸教授、行川一郎教授、岡本祥子教授ありがとうございました!!

へっぼこ先生

行川 一郎

半世紀近くも前に目にした「へっぼこ先生」。何かとお思いだろうが 1970 年代半ばに放映されたサントリーオールドの TV CM に登場したセンセイである。作者は川上澄生。版画家であり中学の先生だった。飄々(ひょうひょう)とした作者の自画像が何とも愛らしい。

センセイといえば、自習時間に突然教室に来てオレンジ色の墨汁(添削用朱液)で黒板に殴り書きをしていた組合活動一筋の小学校の先生。芸大出身をやたら吹聴するものの実力微妙だった中学校の美術の先生。私にとってセンセイという言葉は奇人変人の代名詞にも近かった。団塊の世代ゆえか 6 年間クラス替えなしの小学時代、1 学年 700 人という中学時代を過ごした私には戦後教育に楽しい思い出はあまりない。だが高校・大学その後と、人に恵まれたためか結果として大学教員としての道を歩むこととなった。人生の成り行きは 不可思議である。

勤務先の 神奈川大学では奇縁で、仏語クラス仲間で大学同期の松浦春樹教授と籍を同じくさせていたのだが、本学発行「学問への誘い」への彼の寄稿文の一節に「人生の最大問題は、就職である」「大学教員の仕事の一つは、専門とする分野の謎解きであるが、常に思うのは、最大の謎は自分だということである」「我が二十代の今昔物語」より」という含蓄に富んだ

言葉がある。

先生にだけはなるものではないというメッセージを小学同窓生のブログに偶然みつけたとき「ちゃんとやってるよ」と思わず独り言をいったものだ。その同窓生との再会の席で我が人生の選択へのお褒めの言葉をもらったが、平凡な道に抗(あらが)った昔の私を知る友からのエールだった。が、今まで自分はどれほどだったかとも思うのである。

司馬遼太郎は「自分にきびしく相手にはやさしく」そういう自己を謙虚に確立するように、と若者に語っている。(「21 世紀を生きる君たちへ」『十六の話』中公文庫所収) 私は長く生きてきてもついぞ果たせなかった。所詮、へっぼこ先生である。

版画家としての川上澄生は英語教師との二足のわらじだったそうだが、彼ならばこそというよりも遙か遠い時代のセンセイ稼業だからこそ、と言った方が正解だろう。今の時代、教育に必要なのは CS、サービス、質

保証。これから先、大学教員にとっての教育・研究環境は更に急激に変化していくだろう。

奉職後すぐ、書棚に飾るべく購入したのが川上澄生全集(14 巻)だ。ドラッカー先生の全集よりも実はこのへっぼこ先生の版画全集のほうに奥深い魅力を感じるこの頃である。

(所員/なめかわ・いちろう)



川上澄生『へっぼこ先生いろいろは人物』 講書房, 1974 より

国際経営研究所を振り返って—学生教育を考える—**岡本 祥子**

国際経営研究所は、研究者にとっても、勉強しようとする学生さんたちにとっても、とても便利で有意義な場所だと思う。

ここは、文科系の研究者にとって、個々ではやりづらい課題でもグループで研究し、その成果を、大きくまとめることができるし、正式であると面倒な手続きのいる海外の研究所との交流でも、気楽に研究の成果を持ち寄り議論することができる場でもある。例えば日韓共同研究会が、2012年3月に行われた。共通テーマが「国際物流の新動向と課題」で、「一層のグローバル化に対応する日本企業と貿易の電子化」について発表・討論し、両国の研究成果を認め合った。もともと、韓国で行われた学会のシンポジウムに参加したときに、日程を一日のばし、韓国の大学の研究所で発表してお世話になったのをきっかけに、当研究所での交流となったのだが—ただ、その後についてこなかったことが残念であった。

特に、私が良い企画であると思ったことは、この研究所主催の会と授業とのコラボによる講演会である。そもそも、我々研究者にとって専門の講演会に参加する機会は多いが、講演会というものにあまり近づかない学生さん向け講演会の企画は難しい。従来、研究者は良い研究をしていれば、その後姿が学生の教育になるなどと教えられたが、今は、かなり異なっている。

海外の研究者によるものだけでなく、実際今、日本社会の中でイニシアティブをとっておられる方々による話は、学生や私どもに、大いなる刺激を与えてくれると思う。

今日、有名な方々をお迎えしての大々的規模の会がよく見られる。大学で行う講演会の醍醐味の一つは、普段、個人としてはなかなかお話を直接伺えない方を、呼び出すことができるということである。大いに見分が広がるのである。

またその一方、小規模で、片膝を張らない講演会も大学ならではの、である。講堂内部の雰囲気柔らかく、学生が質問をし易い。そのようにするためには、一般の研究者や専門家だと、ちょっとしたコツが必要となってくる。それに反して、講演者が大学

卒業生、特に経営学部の卒業生であると余計なことはいらない。今まで勉強してきたことを社会で実践し、自助努力によりそれなりの地位を獲得してきた成果を、母校で堂々と後輩に伝えられればよい。我々はそのように成長した卒業生の姿を拝見できるし、また、彼らを受け入れられる場所を提供できる懐の広さを感じることができるのは、とても嬉しいことである。

この研究所の創設以来、様々な先生方のご努力の結果、続いてきた講演会である。わたくしも、授業とのコラボを活用させて頂いて、2013年ごろから毎年、前期に一人ずつ、いろいろな方に講演を、お願いしてみました。学生さんにとってすべて、わかりやすく楽しい講演会だったかは分からないが、良い教育効果の手ごたえを確信したので、一部を振り返ってみた。これからの活動にお役に立てればと思う。

2013年 キャノン株式会社 人事部長 荻原博氏

彼は、元経済学部貿易学科卒業である。当時、キャノンの社長で経団連の会長になられた御手洗氏の下で、事務局長を担当されていたところをお願いした。テーマは経団連においてどのような考え方がなされているか「将来、どのような人材が必要となるか」についてお話し頂いた。当時、企業間では、英語会話、パソコンこそがこれから必要などと言われていたが、それらの基本はできて当たり前、それより大事なものは、考える力、それを表現できるコミュニケーション力であると力説された。

2014年 一般社団法人 日本貿易会 総務部長 小島 隆夫氏

テーマは「日本貿易会について」である。当時大手商社幹部の参加する日本貿易会の事務局総務部長であり、やはり元経済学部貿易学科の卒業生である。大学として初めて、日本経済7団体の一つで、財界総本山である経団連に引続き、日本貿易会の説明を頂いた。特に、日本商工会議所の国際部長と連携を結び、日商の“国際ビジネスe-検定”を一部の大手商社内部の一般職対象に、貿易知識を勉強させるための検定試験を導入することになり、将来の日本貿易界を担う若者を作る礎を作られた。

2015年 横浜税関総務部次長 深山正俊氏

彼は「アジアにおける貿易促進と税関」というテーマで、当時、アジアに目標を向けた日本企業や官庁向けに、内容を分析・解説された。

同年 横浜税関総務部 税関広報広聴室長 石川一彦氏

「税務職員になるためには」というテーマを学生向けに説明頂いた。

ペッパー号 (ゴールドレトリバー 3歳)

この彼は、身分として税関嘱託職員であり、麻薬摘発の第一犬者(第一人者)である。引退後は、年金も出る身分である。

楽しい雰囲気を作るための工夫の一つである。麻薬発見のデモンストレーションを、希望された学生さん達と一緒にいった。

2016年 HOYA株式会社ビジョンケア部門 日本営業部 大阪第三販売課マネージャー 吉田 寛氏

「企業のグローバル化」特に自社の洪水時の事例をあげて説明。そして、自宅での勤務体系の問題点(この企業では、もうすでに一部実行している。)について実情説明。彼も、経済学部貿易学科1998年度の卒業生である。

同年 株式会社日本国際電気 (M&A 前社名)**人事総務本部 人材戦略部 部長代理 末岡麻希氏**

「企業のグローバル化におけるリスクと挑戦」将来に向けてリスクにならない人材をどのように考え採用するかについて説明頂いた。彼女も1998年度の経済学部貿易学科の卒業生である。

2017年 財務省関税局関税課 関税企画調整室長 片岡拓文氏

「我国の安全安心と経済財政を支える関税・税関行政について」かなり踏込んだ内容を説明された。

現在は、関連部署へ移られている。

(所員/おかもと・しょうこ)

☆☆☆☆☆ 所長より ☆☆☆☆☆

今年度退職される三名の研究所所員の皆さんから、それぞれ短い一文をいただいた。行川先生の一文はお人柄の良く出た心にしみるお話だと思う。後藤先生はプロジェクト活動でさまざまな現場を見て、大切なのは生活倫理だと確認されたとおっしゃられるが、先生自身が大学運営で、まさしく倫理感を示してこられた。岡本先生はご自身の寄稿文のように、研究活動を学生教育に存分に生かされ、多くの学生に刺激を与えられてきたことはご承知の通りだ。三者三様、学部のそして研究所の運営に大きな貢献をされてきたことに、あらためて感謝申し上げます。

ここ数年で、長年勤務されてきた先生方が次々に退職ということになる。二年後にはくみなとみらい>に移転し、研究所を取り巻く環境もかなり変わるのではないかと思うが、学部設立当初からの「新しいことに挑戦する」「学生教育に全力を尽くす」というスピリットを保持し、それこそ「未来志向」の気風のもとでの新天地での活動への序章となるよう、4月以降も所員の皆さんのご尽力をお願いします。

国際経営研究所 所長 石積 勝

2018年前期 株式会社栗田商会 代表取締役社長 栗田武明氏

「社会人そして経営者とは」をテーマとして、まさに青年実業家としての感性で学生に対し経営を語った。彼は、2004年度経営学部の卒業生である。様々な観点からの質問が多かった。

2018年後期 今回は、今までとは少し異なった形式をとった。「女性の活躍する社会」というテーマで、二人の女性に卒業からどのような巡りあわせで、これらの職に就き今の状況となったのかを語ってもらった。

株式会社 ランドマーク 代表取締役社長 青山智子氏

彼女は、神奈川大学短期大学部商科を卒業されて、大手商社へ就職、日本企業の体質に嫌気がさし、外資系のノースウエスト航空会社へ転職、そこで、宅建の免許をとり不動産の会社を興された。現在、国内では、大手の不動産企業グループに入り、海外向けとしては、アメリカのテキサス州に支店を出されるまでになった。

日本銀行 鶴飼晴美氏

彼女も神奈川大学短期大学部商科卒業生である。彼女の場合は、日銀の面接で最後の質問に答えた後で、日銀の面接スタッフから”君はよく勉強しているねえ”といわれ、帰宅する前に内定の通知が届いたくらいであった。優秀で今も、頑張っている。

このように、自分の将来をただ、流されていくだけでなく作り変える人。人から感心されるほど真面目に自分のやるべきことに取組んで、それを続けている人。やはり女性の活躍する社会は、大変だが、決してふさがれてばかりいるわけではないと感じたわけである。

共同研究プロジェクトに関する若干の思い出

後藤 伸

わたしが神奈川大学の経営学部に赴任したのは、このキャンパス（当時の名称は平塚キャンパス、現在は湘南ひらつかキャンパス）が開設されてから2年目のことであった。キャンパス創設にあたったメンバーの多くは退職や転出されるか、あるいは惜しくも鬼籍に入られた。いま残る創設メンバーもまもなく退職の時期を迎える。国際経営研究所（以下、研究所と略す）の設立時の経緯については、創設メンバーによる回想がふさわしいであろう。わたしは赴任して以降の研究所での共同研究プロジェクトに関する若干の思い出を記すにとどめたい。

赴任して間もないころ、研究所ではかなり大人数の研究グループが結成され、その一員として参加したように記憶する。このあいまいな表現は、研究グループに参加したものの、文献講読といった地味な研究活動はあまり行われず、海外を含めた調査旅行が中心であり、わたしはそれには参加する機会がなかったからである。この大人数のグループでは学部創設の立役者であられた箕輪成男先生が陣頭指揮をとられ、佐久間賢先生や田畑光永先生が旅行計画を練っておられたように記憶する。

創設期の疾風怒濤をへて、時限的な共同研究プロジェクト方式が研究所のメイン事業として定着しはじめたのはいつのころであろうか。この研究プロジェクト方式に参加して思い出深い人物はお二人である。お一人は海老澤栄一先生で、先生主催のプロジェクトでは日本各地の地場産業の研究調査に赴く機会を多くえることができた。もともと農耕民族系なのか出不精であったわたしが西に東へと駆けずり回れたのも、先生のおかげである。また、調査にあたっては事前の質問表の送付、また終えての礼状や研

究成果の送付など、世間では常識である礼儀作法を身につける貴重な体験をすることができた。もう一人の思い出深い先生は、三村真人先生である。先生は港湾・物流を専門とされるが、わたしが海運史に関わったことから、内外の港湾ターミナルの聞き取り調査に同行する機会をえた。コンテナ・ターミナルは広大な敷地に遮蔽物もなく、寒風吹きすさぶなか陸上から海上からターミナルを視察する機会はそうえられるものではない。三村先生は韓国が大好きであられるが、夜、釜山港近くの屋台で焼酎を飲んで身体を温めた記憶はいまなお鮮明である。

こう記すと、共同研究プロジェクト＝調査旅行と等置され、物見遊山だとあらぬ誤解を受けるかもしれない。しかし、いま振り返ってみると、研究プロジェクトをとおして地域に踏みとどまって活躍されている人々に直接お会いし、そのお話を伺えたのは貴重な機会であったと感じる。平成不況はなによりも地方の経済を疲弊させ、過疎化と高齢化の波がそれに覆いかぶさった。さらに、グローバル化のかけ声とともに地域を支えてきた産業の空洞化が進んだ。その中であって自立しつつも人々の協働の輪を築き広げようとしている人々が地方には大勢いる。いずれの方々も魅力的な人であった。そこからある共通のキーワードが導かれるように思われる——女性、日常生活、そしてエコロジー。生産と消費のロジカルなサイクルではなく、むしろそれを根底で支えている生活倫理（MOTTAINAI）の見直しと再設定が大切なのだという教えを受けることができた。

研究所の共同研究プロジェクトのますますの発展を祈念して、また所員のみなさまおよび事務局の方々にはお礼を申しあげて、擱筆する次第です。

(所員／ごとう・しん)

◆◆◆国際経営研究所よりお知らせ◆◆◆

2月末に製本機が国際経営研究所に納入されます。

所員の皆様の研究活動にご活用いただければ幸いです。



編集後記

第60号をお送りいたします。本号は三人の先生方に国経研での活動などについて振り返って頂きました。御多忙のところ原稿をお寄せ下さり有難うございます。今後とも本研究所の活動をご支援いただけますようよろしくお願い申し上げます（Y）